天花 TENGE

山口県立美術館ニュース

創刊号

昭和５４年５月１日
発行山口県立美術館

香　月　泰　男

1911(明44)～1974(昭49)

『雲』

(シベリア・シリーズ)

1968年、油彩・キャンバス
116.1×72.9cm
画面下部中央、防毒マスク
下部にサイン　y. kazuki
山口県立美術館蔵

山口県立美術館の課題

館長　河野　良輔

県庁前の亀山公園の一角に、県立美術館の建物が誕生した。その外壁のレンガは、明るく周囲の石垣や裏山の新緑に映えて調和し、美の殿堂にふさわしく、実にさわやかな景観を創り出している。

この四月一日には、館の組織も発足し、今秋十月七日の一般公開へ向けて、館事業や環境整備など運営の準備に万全を期すことになった。

これまでの開設準備は、昭和四十九年十一月に策定された山口県立美術館建設基本方針にもとづき、館の建設を中心に、館蔵作品の収集並びに自主企画展など館事業のための基本調査に力を注いですすめてきた。

この基本方針に描かれている館の性格については、ひと口に言えば、〝山口県の美術館〟を目指したものであり、郷土の自然と歴史にはぐくまれたものの中にひそむ豊かな人間性が語りかけてくるような美術館づくりを願っているといえよう。

本県の特色を生かした郷土色豊かな美術館

本県は、これまで政治土壌の陰にかくれ、文化後進県とさえささやかれているが、国内・外の美術界において、重要な役割を果していると評価される作家を意外に多くかかえている。

室町時代の大内文化における雪舟をはじめ、藩政時代の雲谷派の画家たち、さらに、近代日本画の発展に大きな足跡を残した狩野芳崖や森寛斎を擁するなど、むしろ他県には見られない特色のある美術文化の歴史と伝統をもっているともいえる。

しかしながら、本県が誇るこれらの作家を含めて、本県の美術文化に関しては、従来十分な調査研究がなされていなかったというのが実情である。

県立美術館の建設を機に、まずとりくむべきことは、館自らが、主導性をもって、本県美術文化の基礎調査を実施することである。計画的、系統的な調査を通して、本県関係作家の画歴などの空白部分を解明したり、現段階では全く埋没しているが、美術的な再評価が可能な作家を発掘したり、また本県美術にかかわる資料を地道に収集し、整理しながら、館の基礎資料の累積と充実をはかる必要がある。

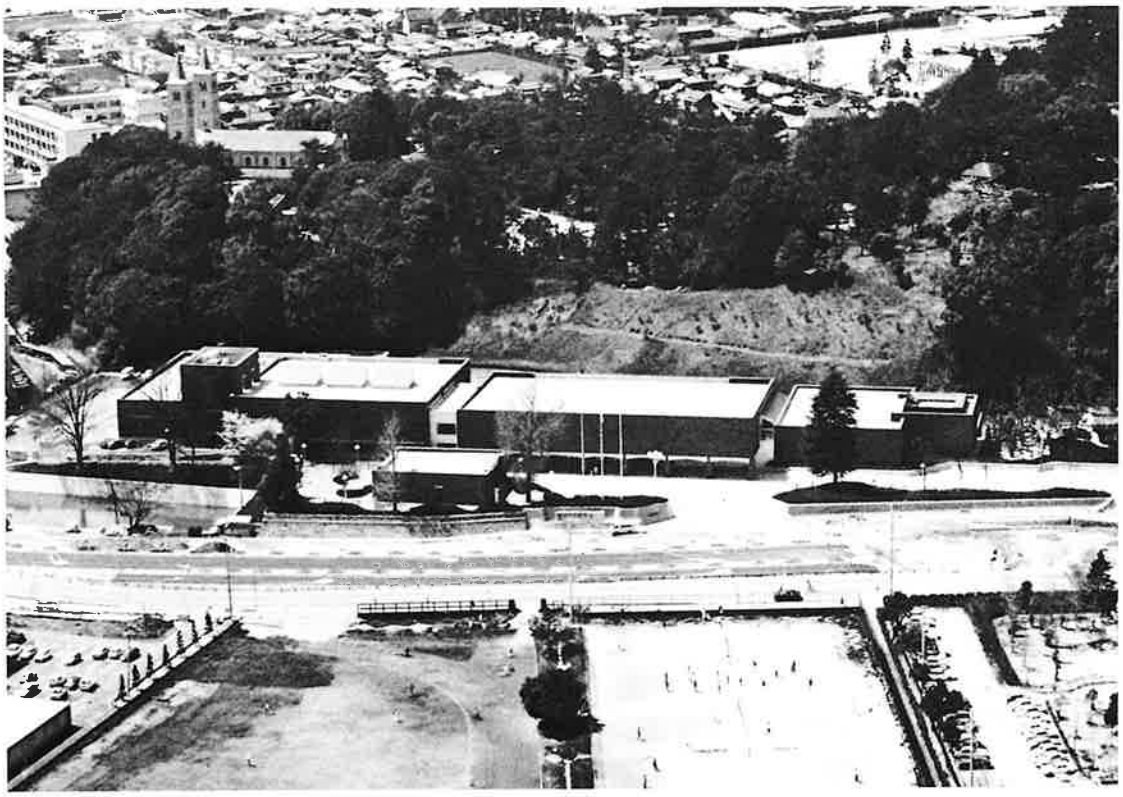
このような基礎調査研究をもって、本県美術の系譜をたしかめ、体系化に努めることが、館の当面する、また長期にわたって果すべき大きな課題である。

さらに、この調査の成果は、県民の鑑賞や研修活動の上で、生きた活用がなされて意味を増す。常設展や自主企画展、あるいは美術講座など館が企画する事業内容を構成する上で、効果的に利用し、アレンジして、県民へ提供したり、また美術愛好者や研究者からの要求に答えて、調査資料などを直接的に提供するなど、山口県の美術資料センターとしての機能を果す役割もある。

県民が参加する開かれた美術館

県立美術館は、多年にわたる県民の要望にこたえ、県民の文化的欲求を充たすために建設されたものである。したがって、すべての県民に門戸を開放し、その機能を十分果たしうる、自己教育の場として性格づけられなければならない。県民自らが、情操を豊かにし、知的欲求を充たし得る最も純度の高い健全な機関としての役割を果たすということを、館は自覚しなければならない。

さらに、単なる鑑賞、研究の場にとどめることなく、県内美術家による作品発表の場、美術愛好者による



創作の場、あるいは、人と人との交わりの場、憩いの場として、県民の誰れもが親しく参加でき、それぞれの文化的欲求に対応できる場を設けることも、館に課せられた課題であろう。

〝開かれた美術館〟を指向する県立美術館の願いは、参加する県民自らが、館活動の主体者であってほしい、ということである。

県民と館が、連帯して悩み、考える、新しい県民美術文化創造の場、そこに、わたしたちの明日の美術館像がある。

県立美術館が、〝山口県の美術館〟として、独自なものを形づくり、郷土色を十分に発揮しながら、しかも、地方的な枠をのり越えた普遍性に結びつく発展的な意味でのローカリティーを目指すとすれば、館活動は、県民のもとめる声とともに、たしかな美意識と見識に裏づけられたものでなくてはならない。

しかも、その活動の一つ一つが、またその積み重ねが、あらたな県民文化醸成へのてことしての役割を果たすものであれば、館自らが、現在の内外の美術文化の流れを的確にとらえ、その視野にたって、県民の美術文化が果たさなければならない課題を、じっくりと見定めることである。

美術館活動は、将来にわたって、極めて長い時間的な幅でとらえて行かねばならない。予測可能な限りの長期プログラムを持つことが望ましい。しかしながら、一方で、県民文化創造へのてことしての役割をもつ以上、県民の館活動への積極的な参加を前提とする、美術文化創造への動機を生み出す具体的施策をくむことも大いに意義がある。

本県でなくては出来ない、本県の美術文化を代表するようなシンボリックな事業を実施して、短期的効果を上げる配慮も必要であろう。

以上、県立美術館の発足にあたって、頭の中に描く館の進む方向性について述べてみたが、本館のように、館のスタッフ全員が未経験者ばかりで構成されている場合は、まず館員自らが、基礎的な美術館活動に必要な能力を涵養することがなによりも急がれなければならない。

館員一同、県民や専門家の貴重な声に十分耳をかたむけ、より充実した活動を期してじっくりと長期的なテーマを創り出す基礎的作業から第一歩を踏み出すことにしたい。

美術館案内

美術館正面

明るい設計
多様な展示空間

山口県立美術館は、山口市の中心街を一望できる小丘陵、亀山の東麓にある。亀山の山頂にそびえるサビエル記念聖堂をはじめ、県の博物館や図書館などを擁するこの一帯は、大内文化の歴史を秘める市民の憩と散策の場として、市民に久しく親しまれてきた。近代的な美術館の建設は、文化ゾーンとしての幅と厚みを加えた。憩と散策の地としてこの一帯に足を運ぶ人々は、緑の中に佇立する聖堂の二本の尖塔を見上げ、麓に横たわる華麗な美術館のたたずまいをみる。そしてここちよい調和感を覚えるであろう。

この美術館は、地下一階、地上二階建ての本館と、別棟の講座室からなっている。

まず正面の広い石張りの階段を上り、美術館の正面に立つ。目前に広がるレンガ壁面のヴォリュームと壁面をささえる柱列、そして柱と柱をつなぐ緩やかな曲線には、古代建築の気品と重厚さを感じさせる。

館内に入ると、そこは左右に広がりを持つエントランスホールである。左側には受付カウンター、その奥にはロッカー室があり、入館者は自由にロッカーを利用できるようになっている。右側は来館者用化粧室で、ここでは車椅子でも容易に利用できるよう設備が整っている。

正面突き当りのスロープを左へ上れば企画展示室、右へ上れば常設展示室である。一階の常設展示室は、目的にしたがって四つの小室に分けられ、山口県関係作家の資料、小林和作関係の作品、香月泰男の作品、郷土工芸の作品などを常時展示している。

右側の最初の展示室は資料展示室である。必ずしも広くはないが、研究展示的な方向を持つ、特色のある展示室である。続いて小林和作室は小林和作の代表作を展示するほか、彼の多様なコレクションを分類、展示するため、一部に固定のガラスケースを備えており、この二室の間の壁面は、スライディングウォールによって二室を一室として利用することも可能である。

一番北側の小室には香月泰男の作品を展示する。この展示室の壁面は御影石張りで、照明には自然光を採り入れるよう工夫され、落着きのある独特な雰囲気をかもし出している。

つぎに郷土工芸室は、萩焼や赤間硯などの工芸作品を展示する。展示室の中央に固定ガラスケースを備え、茶陶萩焼の展示効果をたかめるために背面にあかり障子を入れ、和風のしつらえとなっている。また移動展示ケースを置き、多様な作品に対応することができる。室の一部の壁面はガラス面となり、和風庭園をながめながら休息をとることができる。それに前室壁面にはニッチと呼ばれる小さな展示空間があり、展示室にないしゃれた雰囲気を感じさせる。

第一常設展示室左側のスロープを上れば、第二常設展示室である。この展示室には山口県関係画家・彫刻家の作品を展示する。左側には固定ガラスケースを備え、おもに日本画の展示に当てる。このケース前面にスライディングウォールを引出し、壁面とすることも可能である。

企画展示室は常設展示室と同様、一階、二階に分れている。一階の第一企画展示室は最も広い展示空間を持ち、さまざまな展覧に適応できるように工夫されている。この展示室の一番の特色は、大きなスライディングウォールを持つことによって、

一階正面スロープ

一階ロビー

展示壁面の延長を容易におこなうことができることにある。また、照明は、特殊なランプで自然光に近い効果がえられるように配慮されている。

天井から採り入れた自然光に照らされたスロープを上がると、第二企画展示室である。この展示室は、一方に固定ガラスケースを備えるだけの簡潔な室で、第一企画展示室と第二企画展示室は、あたかも一つの空間であるかのように設計されている。しかし両室の間仕切りが必要な場合には、スロープ側にスライディングウォールを立て、展示壁面を延長することができる。さらにガラスケースの前面にスライディングウォールを引き出すことも可能である。第二企画展示室を出ると休憩室である。

ロビーは、すべての展示室と結ばれ、その休憩スペースとして利用されるように考えられている。ここでは天井まで開放された大きなガラス面を通して、屋外彫刻を楽しむことができるし、さらに、裏山の豊かな緑を楽しむこともできる。また、ロビー左右の出入口は、屋外展示場に通じており、ここから、戸外に出、現代彫刻の一つの方向を示唆するモニュメント群が、一面の常緑芝に横たわるさまを眺め、またこれらの作品と直接、語らいあうことも、一興である。

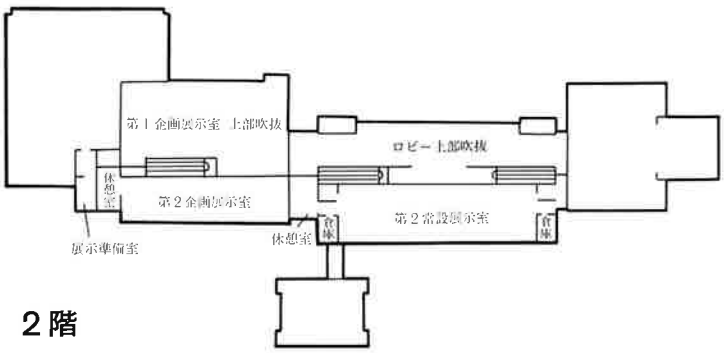
別棟の講座室は、本館前にある。この講座室は、主に絵画・陶芸などの実技講座用に設けられたが、美術に関する講演や美術教養講座にも利用できる。

美術館平面図

1階

〈建設概要〉

敷地面積	1万1545㎡
建物面積	4077.168㎡
建物延面積	5420.350㎡



2階

コレクション 現代から雪舟へ さかのぼる

山口県立美術館の大きな特色の一つは、館独自の収集方針に基づくコレクションである。このコレクショ

第二企画展示室

第一企画展示室

ンで構成される常設展示部門は、郷土にゆかりの深い作家たちの代表作に、いつでも気軽に接することができることを意図して設けられた。

第一次収集計画によるコレクションには、四つの柱がある。「香月泰男」、「小林和作」、「郷土工芸」、そしていま一つはその他の「近代現代の郷土の作家たち」である。郷土の土壌から生まれ育っていった作家たちの業績を見つめなおし、各々の個性的な芸術表現を深く理解すること。そして、その背後に流れる美術思潮の大きな変遷を見さだめ、その体験を自分たちの新らたな創造の糧として生かしていくこと。この二つが、常設展示された作品との身近なふれあいの中で生まれてくる事が期待される。

香月泰男・小林和作

三隅町出身の香月泰男、秋穂町出身の小林和作。この洋画界の二巨匠の名は、すでに県民に親しいものとなっているが、香月泰男の「シベリア・シリーズ」と、小林和作の代表作及びコレクションとは、常設展示部門の主柱といえよう。

香月泰男のライフワーク「シベリア・シリーズ」は、そのほとんどが館のコレクションであり、常時約十五点展示され、いつでも香月芸術の真髄にふれることができるとともに、年三回の展示替えでその全貌が把握できる。シリーズ第一作の「雨〈牛〉」から晩年にいたる表現の変化、あるいは時の経過に従って熟してくるテーマの変遷などがわかりやすく展観され、将来はこれにシリーズ以外の作品や、画稿類を加えることも計画されている。

墨色という言葉で壮大な叙事詩をうたいあげたこの作者は、また「海(ウ)拉(ル)爾通信」にみられるような、異郷にあって妻を想い子をおもう慈父でもあった。そうした香月泰男を、さまざまな角度から掘りおこしていく方法が検討されている。

小林和作は、独得な画風で知られる画壇の重鎮であったばかりでなく、自らが奔放なコレクターであったことでもよく知られている。特に山口県には、独立美術協会展最後の出品作「春の海」などの代表作のほか、愛蔵コレクションや、全国各地へ取材旅行に歩いたときのスケッチが多数寄贈された。これらによって、小林和作の幅広い交友関係や古典に対する深い知識、さらには作画過程での苦心などが窺われ、興味深い。また小林和作には著述も多く、言葉として語られた一面も、作家を知るうえで重要な手がかりを与えてくれるであろう。

郷土工芸

ここでは、国の重要無形文化財に指定された萩焼や、鎌倉時代以来の伝統をもつ赤間硯、大内塗、長州鐔、さらに県下各地の窯業など、郷土山口の風土に生まれ育った工芸品の系統的な収集と展示が課題となる。当面は、三輪休和の「萩編笠水指」をはじめ、故坂倉新兵衛、三輪休雪、坂田泥華、坂高麗左衛門、田原陶兵衛など、山口県無形文化財に指定された伝統工芸作家等の作品から、「暁雲シリーズ」で芸術選奨を受けた現代工芸の吉賀大眉の作品まで、長い伝統の中に培われた技術と斬新な感覚で洗練された萩焼が中心となる。また赤間硯に近代的な造形性を吹き込んだ堀尾卓司の作品が展観される。

近代現代の郷土の作家たち

近代以降に活躍した作家では、狩野芳崖から先鋭的空間造形の作家にいたる幅広い人々がとりあげられ、明治初期以来の山口県関係作家の作品が常時陳列される。

まず日本画では、狩野芳崖の「四

季耕作図」、森寛斎の「月・葡萄・栗鼠図」が近代初期コレクションの白眉である。さらに高島北海「山水図」、松林桂月「愛吾廬」兼重暗香「梅にかささぎ」と、いわゆる南画派、あるいは折衷派につらなる作家が続く。また、京都人ではあるが、祖父の代から、山口と深いかかわりがあった福田翠光の「大鷹・若隼」も見落すことができない。さらに戦後活躍した藤田隆治の「闘魂」、沢野文臣「淀の河洲」、小野具定「裏日本」などには、画面処理や表現理念に、現代日本画の模索する姿が浮き彫りにされているといってよいだろう。

洋画では、技術の第一歩から移入しなければならなかった明治初期の作家に河北道介の名がある。現在寄託扱いとなっている河北道介の「肖像」は初期洋画史の一面をうかがう意味で貴重な資料である。続いて永地秀太「しぼり」、桑重儀一「ホノルル」などの官展系作品。水彩画史に特異な地位を占める河上左京の「静物」、ユニークな表現で注目される桂ゆきの「虎の威を借る狐」などが収集された。戦後注目を集めた作家の作品としては、松田正平「月夜」、三浦俊輔「えご」、中本達也「黒潮」、宮崎進「旅芸人」、田中稔之「赤の地平」、山本文彦「オートバイ」ほか、写実を基本とした具象傾向から幾何学的抽象傾向まで多様であり、多面的に展開してきた洋画史の複雑な構造を浮き上がらせる力作が肩を並べる。

彫刻では、河内山賢祐の「裸婦」、中野四郎の「淵（エスキース）」、伊藤鈞の「フルートを吹く少女」など、オーソドックスな造形作品が収蔵された。一方、田中米吉、川口政宏、田辺武など、新しい空間表現に力を注いでいる作家の作品、あるいは萩焼作家のうちでも、三輪龍作のように陶芸の新たな可能性を追求する作家の作品も、収集計画のなかで検討が進められている。

美術資料

最後に、すべての作家のデッサンなどは、一括して美術資料として分類される。先に述べた香月、小林の資料のほか、すでに永地秀太、松林桂月などの画稿類が寄贈されており、関係作家の書簡、日記、著作、展覧会資料など、作家の人間像や創作過程を探る上で貴重な手がかりを与えてくれるものや、正確な画歴をたどる上で欠くことのできない記録類の収集が計画されている。

将来は雪舟まで

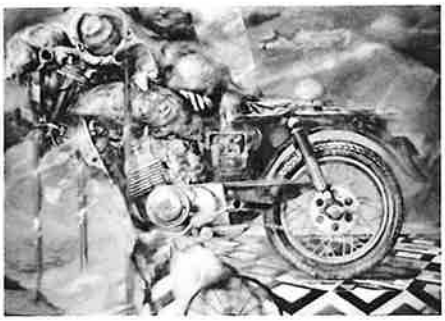
現在、収集活動はその全体計画の中の第一次収集計画であり、常設部門を構成する館蔵品の充実が今後もなお大きな課題である。このことが美術館の性格を決める重要な鍵となっているとの認識をふまえて、開館後の第二次収集計画における近世から第三次収集計画における中世の雪舟まで遡る長期展望に立った作品収集が進められなければならない。

香月泰男「涅槃」1961年

小林和作「春の海」1974年

三輪休和「萩編笠水指」

山本文彦「オートバイ」1971年



伝統の構造

鋳物工房あれこれ(一)

彫刻家　川口政宏

昨年九月から十一月にかけてイタリアの鋳物工房でイタリア式美術鋳造法を研修する機会を与えられた。現在ヨーロッパ美術鋳造の主流はほとんど蠟型鋳造であり、日本の砂型法と違っている。蠟型鋳造法というのは基本的には単純なものである。

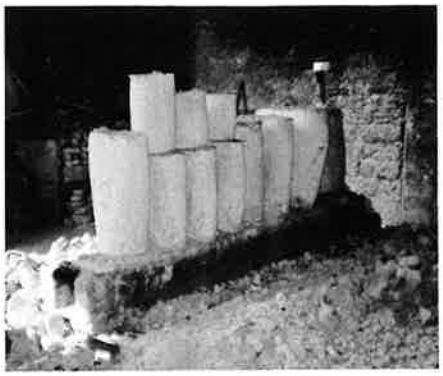
作品原形をポジティブのまま蠟で作成しそれで鋳造する。もちろん原形は破壊されて残らない。中空の作品であれば原形からネガティブな型（雌型）を作成し、その雌型の上に金属の厚みの分だけ蠟を張る。組み合わせて中子（なかご）を入れ蠟を固定し蠟原形を得る。ここで彫刻家をよび修正、再彫刻を行わせる。次に原形に完全に密着して流れる流動性材質（シャモット、耐火物質）でそれを覆う。この型をイタリアでは「フォルマ」とよぶ。このフォルマを蠟が完全に流出するまで高温で焼き、その蠟の厚みの分の隙間に溶解金属を流しこむ。後、フォルマを破壊し中のブロンズを得るのである。鋳造は火の支配する世界である。きっちりと割り切れない部分が多い。原理は単純だが技法は複雑多岐にわたっている。完全な形が出来ても火を支配しきれないと湯は流れず作品は失敗する。きわめて夢幻的な世界である。

私が研修を受けた工房はニッチ氏兄弟の工房、ローマの北八（はち）十（じゅう）程の郊外にある。社長のニッチさんは八才よりこの道にはいり現在七十八才、ファッチーニ、マンズー、マリーニなど、現代イタリア彫刻の巨匠達の作品を手がけ、その彫刻をあらゆる面から見守り援助してきた人である。又氏は日本の文化庁が毎年送りこんでくる若い鋳造家を受け入れその教育に力を注いでくれてもいる。職人は八名、成型から仕上げまで一貫して行うことができる。

ニッチ氏は最近元気がない。というのもイタリア鋳物界はこのところ不景気であり、イタリア屈指のこの工房も年々仕事の量が減ってきているらしい。その上ここも日本と同様に若年労働者の労働意識の変化と低賃金のため、ほこりにまみれた仕事を選ぶ若者が年々少なくなり、後継者も育たないのである。「こんなにおもしろい仕事はない、作品の生命線は我々がにぎっているし、私の匙かげんひとつで作品の質はどうにでもなる。又毎回違った作品とかかわることもできる。工場で単調に同じ品物を作ることと比較してみるといい」とくやしがる。工場は週休二日、朝七時半～夕四時半まで職人達は陽気によく働く。工房に緊張感はない。仕事の合い間に酒までのむ、それ等をのぞけば日本の鋳物工場と変わらない。

弟子の養成も、日本式の「見て学べ」である。なにも教えないし、秀れた職人のそばでひたすら観察させそれを頭と体にたたきこむ。職人の自発性と創造性を自らひきだすことに主眼をおくところは日本の職人育成方法と同じであるが、それを精神主義に置きかえずきわめて陽気にやるわけである。日本の研修生石井さんものびのびと陽気にやっていた。

「日本の鋳造家はみな優秀だ、そのうち仕事を日本人に奪われてしまうのではないか」となかば冗談とも本気ともとれるようなことをいっていた。事実、ドイツやアメリカなどの近代化された工房に仕事をうばわれつつあるし、ミラノなど工業都市の鋳物工房の設備はかなり近代化されていて、コークスに代って重油や電気炉など導入され、能率的な仕事を行っている。この工房には仕事部門で若干の機械化を行っている以外ほとんど昔のままの伝統的な鋳造方法を継承している。「昔の職人が作ったものと同じようによい鋳物を作るには、同じ技法によるのが一番よい」



右　ゼラチン型による蠟原形製作
中　焼成が終了したフオルマ
左　鋳こみ　中央がニッチ氏

と氏はいうが、この言葉は鋳造の本質的な特徴の一つをさしている。

しかしここにも変化は起っている。シリコンラバーや塩化ビニール、ラテックスなどの樹脂の導入は、何百、何千と分割されていた寄せ型をほんのわずかな型の組み合わせに置きかえてしまったし、蜜蠟はその価格と稀少性のため、種々の合成材にとって代えられた。仕上部門はもっと著しい。ガス溶接機、種々の電動工具、研磨機の進出はそのスピードと経済性故に、今や手仕上の位置をうばいつつある。「ねん土の柔かい肉付をもっと硬い素材に再現するためには、たんねんにやすりで仕上げるのが一番よいのだ」と仕上の親方はいう。作業の主役は手であり指である。ニッチ氏は自分はファンタジックに仕事をするとよくいう。「あの親方の手や指にはファンタジーがある、だから彼の手で磨きあげた金属の肌は機械で仕上げたものとはまったく別の光をもっている、彼にまかせておけばよいのだ」と強調した。

実際、彫刻家が自分の作品を自分で鋳造することはあまりない。蠟原形の修正や、仕上などのきわめて重要な部分でかかわることを除いて、その大部分を鋳造家にゆだねる。ゆだねるか、自分でなにもかもやるか（私は後者である）どちらかで中途半端は一番こまるようだ。我々も秀れた鋳造家に仕事をしてもらいたいし、鋳造家にも彫刻家を選ぶ権利がある。氏は「ゆだねてもらった方がよい。ファッチーニは（彼は鋳物のすべてを理解しているが）私の仕事をやりやすくしてくれる。彼は蠟の質を吟味し、注意深く原形を制作し、私はその原形の表面の質感、作品に残されたヘラの跡など彼の希む通りに正確に表現することができる。彼は何も注文しないし、私も何も求めない。おたがいのファンタジーで仕事をするのみだ」とも語った。

氏は又「このごろの彫刻家は良い仕事を希みながらできるかぎり早く安上りにしてほしいと注文するのだ。この人達は自ら『質の問題』を放棄したことになる。私はこのような場合、すべて機械仕上で職人にやらせる。それでも彼にはわからないのだからおもしろい」ともいった。人々は経済の問題についてはうるさいが質の問題には無関心である。彼にとって、機械化や便利な工具類などどうでもよいのだ。かれはこのままの状態で仕事を楽しみたいのだ。

工房はあちらこちら傷んでいるがいっこうに頓着しない。彼はあまたの鋳造家や彫刻家達がこの工房に出入りし、それぞれの情熱や歴史を刻みつけていった道具や壁面から何か生々しい感情を見い出しているような気がする。こうした彼の過去の歴史や経験のつらなりが彼にとっての技術というものの重要な部分をしめているのかもしれない。このような楽しみをあの便利で金儲けのできる機械と引きかえにはしたくないということなのかもしれない。過去の歴史を切り捨て、大量生産、大量消費を続ける日本の現状を見るとき、過去の歴史の重みに耐えながらも、なお余裕をもって自己の存在を主張しつづけるヨーロッパ人の底力を見せつけられたようだ。

参考文献　『鋳造彫刻』Chr.ハウザー著　川合昭三訳　「世界の技法シリーズ」美術出版社

筆者略歴

1936年　東京に生れる
1961年　東京教育大学芸術学科を卒業　彫塑専攻
第五回現代日本彫刻展（宇部）、神戸現代彫刻展、第二回彫刻の森大賞展、現代日本美術展などに出品。
現在山口大学教育学部助教授

研究ノート

芳崖備忘録(一)

狩野芳崖の家系

木本　信昭

芳崖の家系は代々長府藩の御用絵師だった。芳崖の家系を調べる資料としては、長府覚苑寺にある狩野家の位牌、長府毛利家文書の旧臣列伝藩中畧譜などがある。この藩中畧譜のうち現存するものは明治期のもので、系譜で表記された長府文書館蔵本および長府博物館蔵本とがある。

以下長府博物館蔵の藩中畧譜で狩野家の系譜をみる。

狩野・姓・藤原

狩野氏ノ宗ハ徳川氏ノ幕下ニ繁盛ナリ世ニ画ヲ以テ業ト為ス狩野甚七藤原照政ト称スル者江戸ニ於テ臣籍ニ入ル亦画ヲ善クスルヲ以テナリ照政ノ子幸信喜兵衛ト称シ洞覺ト号ス母ハ進藤甚左衛門ノ女江戸ニ生ル長府ニ住ス老テ俸禄ヲ辞シ備前ニ遊ビ更ニ岡山藩ニ仕フ大月喜兵衛入道通栄ト称スル者是ナリ幸信ノ第二子周俊長澤如端ト称シ復タ来タリ仕ヘヲ求ム更ニ狩野如雲察信ト称シ法橋ニ進シ以テ洞覺ノ後ヲ承リ周俊ノ養子俊信實ハ久寶寺屋権兵衛ノ子ナリ母ハ大月通栄ノ女ナリ狩野松隣ト称シ長澤榮州ト称ス重就公ニ寵セラレ萩ニ従フ子孫其地ニ榮フ周信ノ實子忠榮省運ト改メ陽信ト号ス母ハ清末ノ臣廣瀬三右衛門ノ女ナリ陽信ノ娣ハ一人ハ俊信ノ妻ト為リ一人ハ秋吉俊亭ニ嫁ス陽信未タ男子ヲ得ス水川傳蔵ノ三男榮槌ヲ養子ト為ス置信ト称ス後陽信妾ヲ求メテ一男ヲ得タリ置信乃チ出テ別居ス後禄ヲ賜ハル是ヲ諸葛函渓ト称スルナリ陽信ノ男子ヲ晴皐ト称ス董信ト称ス董信ノ妹松田彦太郎ニ嫁ス董信ノ子勝海延信ト称ス

前掲資料の記述にみえる「重就公ニ寵セラレ萩ニ従フ」というくだりの長澤榮州の記録を山口県立文書館蔵の毛利家文書「譜録」で調査する。萩七代藩主重就は、長府六代匡廣の五男で長府八代甲斐守匡敬が宝暦元年(一七五一)萩宗藩をついだもので萩中興の祖と呼ばれる名君だった。重就は襲封後実兄の石田毛利廣定を当職に任じ協力して窮乏をつづける藩財政のたてなおしをはかる。宝暦十三年には撫育方を設けて開作等の大事業をおこない維新の基礎を築いた英邁な藩主で文教の興隆にも尽力した。

長澤榮州に関する山口県立文書館蔵の畧系併傳書写は、明和四年(一七六七)彼が藩に提出したものである。

傳　書　　狩野　法眼正信

右之者実工藤二階堂之一族之由申伝候
一、甚好丹青成一家奉仕足利将軍義政
狩野流之始祖ニ相成候由申傳候
狩野古法眼元信
狩野　法眼直信
右格別申伝無御座候事
狩野　法印重信
右織田信長公江仕之由申出候
狩野　与一　某
狩野　与六輝政
狩野　洞晴幸信
狩野　洞學幸信
狩野　法橋察信
右与一ヨリ何連之代ニ而候哉
長府之御家江被召出御奉公申上候事
長澤　榮州俊信
右父察信遺跡一應家続仕置様狩野与
称号仕候事
一、明和三年三月廿一日長府御家ヨリ
御本家江被召出候其節ヨリ趣有之長澤
与称号仕候事
一、右之趣ニ付長府御家ニ而被下置候知行
之儀者弟松隣江指譲候間於彼ノ御家
御奉公申上候ニ付直様狩野与称号仕候事
一、御恩高弐拾五石
外ニ
一、御扶持方五人銀壱貫目　被
下置候事
右私家畧系伝書如是御座候
御奉書類其外共一切無御座候以上
明和四亥
三月　長澤榮州印　花押

藩中畧譜、畧系併傳書、古畫備考四十一狩野門人譜、覚苑寺位牌、伊秩家文書、諸葛家文書等を参考に狩野家の系図を作成すると次頁の如くなる。

以下系図にしたがって事蹟を略記する。

(1)狩野照政　―延宝四年(一六七六)

織田興兵衛満定の子で右衛門尉信利の孫。織田甚七郎と称したが五才で両親に死別し叔父狩野松伯の養子となる。長じて松平越後守光長に仕え後浪人、延宝四年二月六日病死、昌光院伯應日安居士。墓所は越後高田日蓮宗軒法寺

(2)狩野洞晴幸信　―元禄八年(一六九五)

狩野興六、大月喜兵衛と称す。剃髪して洞晴と号す。延宝元年(一六七三)禁裡炎上後の御所普請の任にあたり後長府三代毛利甲斐守綱元に仕える。元禄八年六月八日病死。信領院幸運居士　墓所は江戸赤坂常

玄寺。余談だが三代毛利甲斐守綱元は元禄十四年赤穂浪士討入の際十人の浪士を預った。

(3)狩野洞學幸信　―延享二年（一七四五）洞晴幸信の子で三之丞。剃髪して洞学と号す。毛利公には出仕せず殿中で絵を描く。綱吉公の目にとまり後作州城主松平越後守宣富公に出仕。延享二年五月四日死去。洞學泰善居士、墓所は作州泰安寺。

これまでの芳崖関係資料では長府の藩中畧譜を原典としたため、洞晴幸信と洞學幸信が同一人物とみなされ、江戸に生れた幸信が長府に来て出仕、後俸禄を辞して備前に行ったとされているが、洞晴幸信は江戸で長府公に仕えたと考えられる。

傳書

覚苑寺位牌

(4)狩野察信　元禄八年（一六九五）―宝暦九年（一七五九）洞學幸信の二男。長澤如端、如運、周俊などと号す。木挽町如川周信の門人で享保十七年狩野免許、法橋に叙せられ祖父洞晴の縁で長府に移り長府七代藩主師就公に出仕する。

この察信が芳崖の曽祖父にあたり、長府狩野家の初代と考えられる。妻は清末藩士廣瀬三右衛門の女。宝暦九年六月十日死去。蔵六斎朴純浄瑞居士。墓所は長府覚苑寺にある。

察信の兄冨信甚七は父の足跡をついで作州公に仕えた。察信には一男二女があり、長女は長澤榮州の妻となり、二女は長府藩医秋吉俊亭の妻となる。

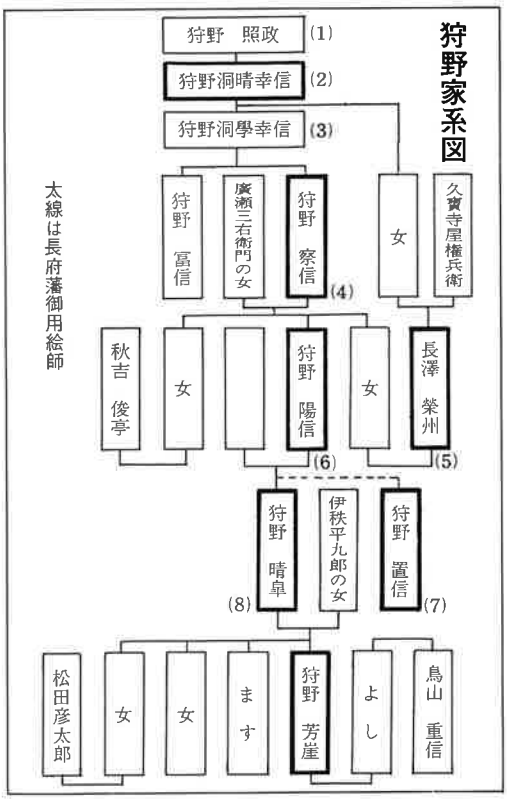
(5)長澤榮州　享保十四年（一七二九）―文政五年（一八二二）久寶寺屋権兵衛の子、母は洞晴幸信の女。木挽町栄川院典信に学び、後察信の長女と結婚し察信の名跡を継ぐ。俊信、典俊、白雪斎と号し、明和三年三月二一日宗藩重就公に出仕して長澤榮州と号す。長府藩の家督は義弟陽信に譲った。文政元年（一八一八）七月二十九日再び姓を狩野と改め養州と号した。文政五年五月十四日死去、白雪斎養州典俊日妙居士、墓所は江戸、芝、日蓮宗正伝寺。

(6)狩野陽信　―文化三年（一八〇六）察信の子で義兄俊信の跡をうけて長府狩野家を継ぐ。忠榮、松隣、省運などと号した。文化三年五月二日死去、霊照院通神省運居士、墓所は長府覚苑寺。

(7)狩野置信　安永九年（一七八〇）―弘化三年（一八四六）水川傳蔵の三男として綾羅木に生れる。絵を度会東明に学び寛政三年（一七九一）十二才の若さで藩主匡芳より二人扶持を与えられ、後陽信の養子となる。遠、榮槌、受運、函渓、耕運とも号した。寛政九年（一七九七）晴皐が生れたため別家、享和二年（一八〇二）元義公より別禄を賜り、諸葛姓を名のる。弘化三年十二月十日死去六十七才、函渓斎弘憲黙翁居士。墓所は長府功山寺蔵海軒。

(8)狩野晴皐　寛政九年（一七九七）―慶応三年（一八六七）陽信の長男、木挽町伊川院栄信に学んで、蔵槌、松隣、董信、環翠斎と号す。慶応三年八月二十五日死去、環翠斎晴皐董信居士、墓所は長府覚苑寺。一男三女をもうける。その一男が狩野芳崖である。

（当館普及課主任）



表紙作品解説

暗い空が画面の上部の四分の三を占めている。その中にやや明るいブルーグレイの雲がながれている。空が尽きるところに、くっきりと山の稜線が顕（あらわ）れ、中景はくすんだ漆黒の闇がふかい。前景では、奥から前面にむかってひろがる自然との連続を、割然とたちきるように黒太の線が水平にひかれ、それを背にガスマスクがみえる。ガスマスクはほぼ正面をみすえながら、白い雲を映している。

昭和11年、東京美術学校を卒業した香月泰男は、しばらく北海道の中学校で教鞭をとったのち帰郷、下関高等女学校に奉職した。召集をうけたのは、昭和18年、三二歳のときだった。この作品は、その配属先、山口市西部第4部隊の練兵場からみた実景に想を得ている。

人間性を無視し、完璧な組織の秩序を最高価値とする軍隊という集団は、香月をますます孤独にした。画家でありながら、そこに所属せざるを得ない自己にいらだち、そのいらだちは、均衡をとるかのように、眼やこころを戸外にむけた。自然や自然の運行のもとにひろげられる目だたぬ〈生〉のいとなみをみつめる眼は、しだいにとぎすまされ、それは満州への出征、シベリア抑留とつづくその後の悲惨な軍隊生活のなかで、いっそう鋭いものとなった。雨〈牛〉（1948）、鷹（1958）、ホロンバイル（1960）、鋸（1964）、伐（1964）、星〈有刺鉄線〉夏（1966）、青の太陽（1969）など、大陸の自然に取材した作品には、孤独な眼がとらえた小さな驚ろきや、それらに投影された作者自身の心境を連想させてやまぬ不思議な力がある。それは、画面をつくりだす独自な視角から生みだされるものであろう。

「雲」と題されたこの作品の視座はきわめて低い。回想によれば、練兵場にたつと、「常栄寺の見える空には、ピエロ・デラ・フランチェスカの描く雲が浮かんでいた」という。黒太の線がたちきる画面の手まえには、厳しい現実を象徴するガスマスクがおかれ、その一線をこえると、二、三片の雲をうかせて大空がひろがる。希望との距離が遠ざかれば、希望はいっそう大きなものに見えてくる。蒼空の雲を反映する眼は、せめても の現実の救いを暗示している。

（安井雄一郎）

美術館から

県民と美術館を結ぶ機関紙〝天花〟創刊号をおとどけします。

「天花」は山口市内の地名であり、ここには、かつて雪舟が居住した雲谷庵が所在していたともいわれています。また、仏教用語で「天花」は、天の花の如く妙好な花をさします。新美術館が美の天花の咲き揃う殿堂となってほしいという我々の願いをこめたものです。

題字の揮毫は井上謙治教育長におねがいいたしました。

このニュースは、美術館収蔵作品の鑑賞の手びきとなるばかりではなく、広く美術館の企画・事業を紹介するものです。

編集に関しても、読者の興味にこたえるように、工夫を凝らすとともに、美術館活動の重要な記録として、後々まで活用されることを願いつつ努力してゆくつもりです。

この創刊号は、新美術館の紹介が主となりましたが、次号からは内容もバラエティーに富んだものを予定しています。

その主なものを紹介します。

館蔵品紹介

美術館所蔵作品の写真紹介と解説

メイン・トピック

企画展や事業のタイムリーな論評

シリーズ〝山口画人伝〟

郷土出身作家の紹介

（予定）森寛斎・狩野芳崖・松林桂月・大庭学僊・高島北海・河北道介・永地秀太・桑重儀一など。

シリーズ〝伝統の構造〟

シリーズ〝研究ノート〟

当館研究員の調査研究が中心。

この他にも、近刊美術書紹介や当館の企画展などの行事・催し物案内および解説も加えます。

山口県立美術館ニュース
「天花」　一巻一号
昭和五十四年五月一日発行
発行　山口県立美術館
〒753 山口市亀山三―一
TEL〇八三二―五―七七八八
印刷　瞬報社印刷株式会社